

1.はじめに

平成の時代に入り、これまで観光地と言われていた多くの地域が、かつての勢いを失っています。このことは、観光が時代とともにその形態を変えていくことを物語っているのだと思います。昭和の時代、高度経済成長を経て観光は大衆化されていきました。大衆にとって観光は非日常（ハレ）のものであり、それは最大公約数的な観光（マストツーリズム）で満足していました。しかし時代は昭和から平成へと移り、観光は非日常（ハレ）から日常（ケ）なものへと変わっていきます。多くの人々にとって観光は、もはや非日常的なものではなく、普段の生活の延長線上になってきたのです。このことにより、人々が観光に求めるものは、一気に多様化していきます。しかし、それらの観光客を迎え入れる側にとっては、その多様化にすべて対応していくことは、不可能です。そこで今、観光地の求められているものとは何なののでしょうか。観光は今こそ明確な基本的理念（コンセプト）を持ち、それにもとづく施策（ポリシー）が求められる時代になったのだと思います。

この委員会では、コンサルタントは入りませんでした。このことにより、私たちは、これまでよくあったようなコンサルタント主導の委員会ではなく、稚拙であっても、最後まで自分たちで考えていかなければ、そんな気持ちが生まれてきました。都心のコンサルタント会社に頼ることなく、自分たちの町は、自分たちで必死に考えなければいけない、そんな時代になったのだと思います。また新しい試みとして、法政大学人間環境学部のサークル「水と緑フォーラム・H O S E I」の学生にも参加していただきました。彼らには「よそ者として、若者として」積極的に意見を出していただきました。

委員8名、法政のみなさん、事務局の2名、このメンバーで2年間にわたり、奥多摩の観光について語り合うことが出来たこと、その時間を共有できたことを、私は大変嬉しく思っております。このような機会を与えてくれた町当局に感謝するとともに、参加していただいたみなさん、本当にご苦労様でした。

この報告書が、これからの奥多摩町の活性化に少しでも役立てたなら、私たちにとって、このうえない喜びです。



平成20年3月
奥多摩町観光ビジョン策定委員会
委員長 原 島 俊 二

2．奥多摩町観光ビジョン策定委員会

1．観光ビジョン策定委員会とは

観光ビジョン策定委員会の発足

奥多摩町観光ビジョン策定委員会は、平成 17 年度にスタートした 10 年間の町づくりの指針である、第 4 期長期総合計画の体験と交流のまちづくり「どうよ山の暮らし」の中で示された「新たな観光戦略の展開」を検討する委員会として、平成 18 年 3 月に発足しました。

委員の構成と任期

委員は、「奥多摩町観光ビジョン策定委員会設置要綱」に基づき、町長から任命され、内訳は、公募による者、識見を有する者等で構成され、任期は平成 20 年 3 月の答申までの 2 年間で、委員は無報酬で毎月 1 回のペースで会議を開催してきました。

委員会の目的

委員会の目的は、第 4 期長期総合計画に定められた「これまでの観光事業の見直しと、新たな観光地づくりの推進と観光施設の充実を図り、基本戦略を定めることにより、観光客誘致を図る」を具体的に検討し、これを報告書にまとめ、平成 20 年 3 月に町長に答申することです。

2．観光ビジョン策定委員会における検討の柱

奥多摩町の現状

全国的に観光が冷え込んでいると言われる今日、当町においても、一頃、年間 200 万人と言われた観光客が、平成 13 年の調査時には 170 万人、平成 18 年の調査時には 145 万人と減少の一途を辿っております。また、バブル経済の破綻とともに、日本中が景気低迷という長いトンネルに入り、最近になってようやく抜け出したと言われながらも、その回復が、地方にまで及ばない状況の中で、当町は引き続き厳しい財政状況にあります。

環境への配慮

先進国が放出する二酸化炭素等の温室効果ガスが過剰になり、地球全体が温暖化現象に悩まされている現在、当町の森林地帯は、二酸化炭素を吸収して酸素を排出するという、大変重要な役割を担っています。このため、より多くの二酸化炭素が吸収できるよう、引き続き森林機能の保全を推進し、自らも二酸化炭素を削減するような町づくりが求められます。

これからの観光振興のあり方

観光は、訪れる人達のためにあるのではなく、そこに住む住民のためにあります。また、観光は綺麗ごとではなく、経済性を重視していかなければ持続ができません。

これからの観光振興を考える時、いかに住民が観光に関わりを持って、生き生きと楽しく暮らしていけるのか、また、お金のない時代、地球環境が悪化している時代に、環境と観光の両立という難しいテーマを背景に、住民の幸福を願いどのように観光を振興していけば良いのか、様々な視点での検討が必要です。

3. 奥多摩町観光ビジョン策定委員会設置要綱

平成 17 年 10 月 7 日
要綱第 46 号

(設置)

第 1 条 住民及び地域が主体となり、新しい観光まちづくりの計画等に関し、調査、研究及び審議を行なうため、観光ビジョン策定委員会(以下「委員会」という。)を設置する。

(所掌事項)

第 2 条 委員会の所掌事項は、次に掲げる事項について調査、検討を行い、町長に提言する。

- (1) 新しい観光事業の計画に関すること。
- (2) 現行の観光事業の見直しに関すること。
- (3) その他

(組織)

第 3 条 委員会の委員は、10 名以内をもって組織する。

2 委員は、次の各号に掲げる者から選出し、町長が委嘱する。

- (1) 公募により選出された住民 8 名以内
- (2) 識見を有する者 2 名以内

(任期)

第 4 条 委員の任期は、第 2 条に規定する提言答申の日までとする。ただし、委員に欠員を生

じた場合の補欠委員の任期は、前任者の残任期間とする。

(委員長及び副委員長)

第 5 条 委員会に委員長及び副委員長 1 名を置く。

- 2 委員長は、委員の互選とする。
- 3 委員長は会務を総理し、委員会を代表する。
- 4 副委員長は、委員のうちから委員長が指名する。
- 5 副委員長は、委員長を補佐し、委員長に事故あるときは、その職務を代理する。

(会議)

第 6 条 委員会の会議は、委員長が必要に応じて召集し、委員長が議長となる。

(報酬)

第 7 条 委員には、報酬は支給しない。ただし、委員会に出席した者に対しては、旅費として議会の議員の報酬及び費用弁償等に関する条例(昭和 31 年条例第 11 号)に規定する旅費相当額を支給する。

(庶務)

第 8 条 委員会の庶務は、観光産業課において処理する。

(委任)

第 9 条 この要綱に定めるもののほか、委員会の運営に関し必要な事項は、委員長が定める。

附 則

- 1 この要綱は、公布の日から施行する。
- 2 第 3 条の規定により、委員が委嘱された後、最初に召集すべき会議は、第 6 条の規定にかかわらず町長が召集する。

4 . 奥多摩町観光ビジョン策定委員会「委員名簿」

任期：平成 18 年 3 月 2 日～平成 20 年 3 月 31 日

役 職	氏 名	区分	備 考
委員長	原 島 俊 二	公募	前奥多摩町まちづくり計画住民委員会委員 奥多摩町森林セラピー宿泊部会委員 奥多摩町グリーンツーリズム検討委員会委員長 奥多摩町体験農園利用者審査委員会委員 奥多摩町下水道事業運営委員会委員 奥多摩町農林業等振興事業協議会委員
副委員長	小 川 圭 一	公募	海沢自治会長 奥多摩町グリーンツーリズム検討委員会委員 奥多摩町体験農園利用者審査委員会委員長
委 員	渡 辺 幸 治	公募	奥多摩観光協会事務局長 奥多摩町森林セラピー宿泊部会委員 奥多摩町体育指導委員 奥多摩町社会福祉委員（民生・児童委員）
委 員	富 田 高 幸	公募	大丹波イルミネーション実行委員会副委員長
委 員	尾 花 洋 介	公募	前奥多摩町まちづくり計画住民委員会委員 奥多摩町まちづくり・ひとづくり審査委員会委員
委 員	長谷川 幸 子	公募	奥多摩町グリーンツーリズム事業検討委員会委員
委 員	榎 戸 恵 浪	公募	奥多摩町まちづくり・ひとづくり審査委員会委員
委 員	星 野 勤	識見	前奥多摩町まちづくり計画住民委員会委員 奥多摩町まちづくり・ひとづくり審査委員会委員長 奥多摩町森林セラピー実行委員会委員

5 . 奥多摩町の観光の歴史

奥多摩町は、昭和 30 年に氷川町・古里村・小河内村の 1 町 2 村が合併し誕生していますが、この時、雄大な自然資源を背景に「観光立町」を宣言して、町の中心的施策として推進してきました。

また、奥多摩町が誕生する前の昭和 25 年に、わが国第 16 番目の国立公園として、秩父多摩国立公園（現、秩父多摩甲斐国立公園）が誕生しました。国立公園の指定地域は、東京・埼玉・長野・山梨の 1 都 3 県にまたがり、当町は 225.63K m²の行政面積の全域が指定されました。

奥多摩町の観光が一躍有名になった出来事が、昭和 32 年 11 月に誕生した「小河内ダム（奥多摩湖）」の誕生です。小河内ダムは、その周囲が 45.37 km、満水延長 13.87 km で 1 億 8 千万トンの水を貯える「東京都民の水がめ」です。

このダム建設のために 945 世帯（小河内村・山梨県丹波山村・小菅村）6000 人が移転を余儀なくされましたが、ダム完成後は、その雄大さを一目見ようと多くの観光客が訪れ、電車やバスで訪れる観光客を相手に土産物店や宿泊旅館等がダム観光に多いに沸きあがった時代でした。

しかし、昭和 39 年の東京オリンピックを契機に、国の経済が高度成長時代に突入、国民所得の倍増とともに一大レジャーブームが到来し、遊園地や動物園等に多くの人が集まる中、ダム観光が徐々に下火になっていきました。

また、マイカーブームが到来し、家族連れ等が多く来町するようになりましたが、大都市東京の身近で安価な日帰り観光地として位置づけられ、車両の渋滞とは裏腹に観光収入は伸び悩み、このため、滞在型施設の町営釣場、町営キャンプ場、温泉センターなどを整備して集客を図ってきました。

昭和の時代、年間 200 万人と言われた観光客も、現在では、145 万人（平成 18 年調査）と減少しており、春の桜・秋の紅葉時期に見られた車両の大渋滞も近年は見られなくなり、目に見えて観光客が減少している状況にあります。

しかし、近年、このような状況の中にあっても、逆に増加傾向にあるのが、奥多摩むかし道や鳩の巣溪谷遊歩道などを散策する人たちです。この現象は、日々伝えられる地球温暖化やこれに伴う自然環境の重要性など、人々の価値観の変化が影響しているものと思われます。このような社会情勢の変化に対応するため、平成の時代に入り、新たな事業として取り組み始めたのが、グリーンツーリズム・エコツーリズム・森林セラピーといった滞在型事業です。これら事業は、従来の奥多摩観光にはなかった体験・参加型の事業で、町の自然資源や歴史に触れ、また農作業を通して様々な体験活動をし、森林の中でストレスを解消して、心の病気を予防するなど、いずれも、町内に滞在をしながら心身を「癒す」事業です。

現在、グリーンツーリズム・エコツーリズム・森林セラピー事業は、走り出したばかりの事業で、まだ結果は見ていませんが、今後の町づくりに期待される事業として推進されています。

奥多摩町の月別入込観光客数（5年ごと調査）

平成13年調査（推計値）

（単位：人）

年/月	日帰り	宿泊	イベント等	計
平成12年12月	44,612	5,312	13,817	63,741
平成13年 1月	42,943	3,082	15,807	61,832
平成13年 2月	44,943	2,446	13,820	61,209
平成13年 3月	80,357	9,130	24,696	114,183
平成13年 4月	100,769	10,023	33,453	144,245
平成13年 5月	142,666	18,046	48,679	209,391
平成13年 6月	69,794	10,826	24,239	104,859
平成13年 7月	103,041	23,060	35,022	161,123
平成13年 8月	170,327	49,609	61,957	281,893
平成13年 9月	115,430	16,275	35,502	167,207
平成13年10月	107,240	9,646	29,726	146,612
平成13年11月	140,789	8,841	37,774	187,404
合計	1,162,911	166,296	374,492	1,703,699

平成18年調査（推計値）

（単位：人）

年/月	日帰り	宿泊	イベント等	合計
平成17年12月	31,716	3,545	12,630	47,891
平成18年 1月	34,966	1,418	14,171	50,555
平成18年 2月	28,981	1,777	11,555	42,313
平成18年 3月	62,788	6,992	25,157	94,937
平成18年 4月	73,020	7,124	30,866	111,010
平成18年 5月	110,118	19,841	43,819	173,778
平成18年 6月	46,544	9,828	18,966	75,338
平成18年 7月	66,259	25,836	26,199	118,294
平成18年 8月	154,908	50,047	65,152	270,107
平成18年 9月	95,231	20,825	37,912	153,968
平成18年10月	86,716	9,710	41,059	137,485
平成18年11月	117,050	7,385	45,455	169,890
合計	908,297	164,328	372,941	1,445,566

調査機関：西多摩地域広域行政圏協議会・社団法人大多摩観光連盟

西多摩地域の年間入込観光客数（5年ごと調査）

平成13年調査（推計値）

（単位：人）

市町村名	日帰り	宿 泊	イベント等	計
青梅市	1,196,853	238,204	686,118	2,121,175
福生市	296,031	2,359	481,084	779,474
羽村市	375,893	3,195	373,400	752,488
あきる野市	1,244,802	126,972	343,088	1,714,862
瑞穂町	28,154	7,091	0	35,245
日の出町	211,261	2,431	28,500	242,192
檜原村	220,801	57,569	96,100	374,470
奥多摩町	1,162,910	166,295	374,493	1,703,699
合 計	4,736,705	604,116	2,382,783	7,723,604

平成18年調査（推計値）

（単位：人）

市町村名	日帰り	宿 泊	イベント等	計
青梅市	1,113,415	130,019	795,050	2,038,484
福生市	410,661	1,284	490,016	901,961
羽村市	334,679	3,458	527,667	865,804
あきる野市	1,174,237	77,106	174,195	1,425,538
瑞穂町	39,597	6,479	28,660	74,736
日の出町	187,593	1,492	16,800	205,885
檜原村	313,988	38,485	4,656	357,129
奥多摩町	908,297	164,327	372,940	1,445,566
合 計	4,482,467	422,650	2,409,984	7,315,101

調査機関：西多摩地域広域行政圏協議会・社団法人大多摩観光連盟

西多摩地域への提言等「観光客アンケート」(5年ごと調査)

平成13年調査時

西多摩地域への提言等

- ・観光ガイドがついてくれば、もっと楽しめるのに残念だ。
- ・今よりもっと色々な所で、自転車が借りられると良いし、道路もそれ用に整備してほしい。
- ・観光地化を進めるよりも、今の自然を、このままで残してほしい。
- ・そば作りがしたい。
- ・カヌーがやりたい。
- ・幼児が遊べる、特に雨天時にはサマーランドぐらいしかないので、施設を充実させてほしい。
- ・道路・休憩所の整備等、高齢者に優しい観光地づくりを目指してほしい。
- ・観光施設が、月曜に一斉に休業なのは困る。
- ・バス等の時刻表(常時アップデートされたもの)、イベント等、タイムリーな情報を広く広報してほしい。
- ・芋煮会・梅酒作り等、観光客参加型のイベントがあればいい。
- ・歴史、自然を楽しむ等の目的・体力等に合わせた、色々なハイキングコースを作してほしい。
- ・車、電車ともに、特にハイシーズンの混雑を解消してほしい。
- ・道路・遊歩道等に工事中の所が多くて不便。
- ・川原まで降りられる所が少ない。
- ・宿泊施設は旅館が多いので、ホテルもほしい。
- ・温泉施設が少なく、混雑しているのもっと増やしてほしい。露天風呂もほしい。
- ・ハイキング・登山で、懸賞つきのスタンプラリー等のイベントがあるとよい。

調査機関：西多摩地域広域行政圏協議会・社団法人大多摩観光連盟

平成18年調査時

西多摩地域への提言等

- ・道の駅があるとよい。
- ・羽村市動物公園内にオムツ替えできるトイレがほしい。
- ・もう少し走りやすいサイクリングロードがあるとよい。
- ・案内板や距離表示をわかりやすくしてほしい(鹿被害の看板等も設置してほしい)
- ・手作り工房めぐりがしたい。
- ・祭やイベントに参加したい。
- ・観光シーズンは、バスの便を増やしてほしい。
- ・陶芸、そば打ち、コンニャク作り、豆腐作り、草花の紙作り、よもぎ団子作り、自然体験等がしたい。
- ・カヌー・バーベキュー・キャンプ、登山、ハイキング、トレッキング、乗馬、牧場見学、ホタル鑑賞等がしたい。
- ・西多摩地域の周遊をもっとアピールしてほしい。
- ・滝めぐりツアー、歴史ツアー等があるとよい。
- ・山菜狩り、キノコ狩りがしたい。
- ・地元土産物をもっと置いてほしい。
- ・奥多摩に桜の名所をつくりたい。
- ・マナーを守って、きれいな観光地にしてほしい。(観光客の残したゴミ等の掃除が大変)
- ・郷土料理の講習会を開催してほしい。
- ・バイクでキャンプできる施設を増やしてほしい。
- ・そば屋が多いので、「そば歩きパンフレット」があるとよい。
- ・ガイドブックやホームページにもっと観光情報がほしい。
- ・JR、バス会社等とタイアップして、宣伝と割引券発行などをしてほしい。
- ・バスをもっと小型化してもよいので、本数を増やしてほしい。
- ・大型の温泉施設や、宿泊施設が隣接した温泉をつくってほしい。
- ・滝や横道、山の草花、見所、産物などを載せた地図を作してほしい。
- ・川への遊歩道やハイキングコースの整備をしてほしい。
- ・駐車場を増設してほしい。
- ・外国語の案内板を充実させるとよい。
- ・ゴミを持ち帰るのではなく、途中の駅やドライブインなどで捨てられるようにしたほうが、全体的に汚れないのではないだろうか。
- ・檜原都民の森や山のふるさと村などは、夏場にもう少し営業時間を長くしてほしい。

調査機関：西多摩地域広域行政圏協議会・社団法人大多摩観光連盟

6 . 観光への想いと期待



委員長 原島俊二

観光は時代とともにその形を変えていきます。奥多摩の観光はこれからどうあるべきなのか、私たちは2年間にわたり、月1度の会議を重ねてまいりました。会議は毎回テーマを決めておき、それについて事前に勉強をして臨みました。

ある月の会議は、「観光事業とは何のために必要なのか」をテーマに話し合いました。結論は「地域が持続するための一つの手段」でありました。ではこの奥多摩が持続していくために、どのような観光を展開していけばいいのでしょうか。

私たちは、先進地視察で群馬県川場村を訪ねる機会を得ました。この川場村を例に考えてみたいと思います。川場村には世田谷区の保養所があり、同区にある小学校八十数校の5年生が移動教室で川場を訪れるなど、世田谷区とは深いつながりを持っています。世田谷区は保養所の候補地を決めるに当たり、五十を越える中から川場村を選んだといいます。ではなぜ川場が選ばれたのでしょうか。川場には「何」もなかったからだ、といいます。では「何」もない川場に「何」があったのでしょうか。

川場村に隣接する片品村を見てみると、その違いが見えてきます。片品村は日本を代表する観光地、尾瀬を持ち、また群馬県でもスキーのメッカとして知られています。1970年代から80年代、おりからのレジャーブームによって、多くの観光客が片品村を訪れました。宿泊施設は増築に増築を重ね、町の景観は、大きく変わっていきました。他方、川場村はその時代の流れに乗ることはなく、農業の村として静かな暮らしを続けてきました。結果、町の景観は変わることなく、今も昔のたたずまいを残しています。

片品村を批判しているわけではありません。昭和の時代、一つの観光先進地であったのです。しかし現在の観光の流れを見た時、「変わらないことに」価値を見つけ、またそこに住む人たちの営みまで含めた地域に関心が集まり、そこに観光の魅力を感じている人たちが、確実に増加しています。川場村は今でも農業の村であり、観光はプラスアルファと考えています。農業に軸足を置き、それを観光に生かしている川場の人たちを見る時、現在の観光のあるべき姿の一つを見ることができると思います。

観光は町づくりそのものだと思います。町づくりに「経済」活動は重要な要素です。川場村では、道の駅「田園プラザ川場」で、地域の農作物やおばあさんたちが作る、漬物、梅干などが人気を呼び、関東圏の道の駅人気ランキングで1位を続けています。そこにある商品は、これまでの観光地のお土産と違い、ふだん自分たち

が食べているもの、作った人の気持ちが伝わる商品が並んでいます。また川場はりんごの産地としても知られていますが、市場に出ることはあまりないといえます。それは農家と消費者が密接に結びついているため、流通には乗らないのです。喜んで買っていく人たちがいることは、作る人たちの生きがいへと続いていきます。

この委員会は、第4期奥多摩町長期総合計画のもとに組織されたものであり、会議には第4期長期総合計画書を常に持参し、指針としました。私たちは、観光産業部会の理念「どうよ、山の暮らし」をいかに施策に反映させるか、を考えてきました。2年間に及ぶ会議の中で、これからの奥多摩の観光に大切な理念、それは「奥多摩をもう一度見つめなおし、山村の暮らし、文化に誇りを持つこと」、そこに意見が集約されました。

この理念のもとに、一つの施策を提案します。健康、環境をキーワードに、二十一ある自治会ごとに散策マップを作成します。新たな道を作る必要はありません。それは生活道をつなぐものでいいのです。そこには山村の静かな暮らしを垣間見ることができる道、そして住む人たちとの垣根の低い道があればいいのです。環境を考え、移動には公共交通機関であるJR、バスの利用を提案します。観光客と住む人たちの交流により、お互いが元気になれる、それが目指すところ、だと考えます。





副委員長 小川圭一

先ず単純になぜ観光客を誘致するのか考えてみたい。
当地で住民だけの力で生きていけるのならなにも観光客に来てもらわなくてもいい。

でも、今の奥多摩で生きていくのは、そう簡単なことではない。

そこでみんな色々試行錯誤しながら、この素晴らしい自然豊かなところで末永く生きていくための手段の一つとして「観光客の誘致」を考えるのである。

観光客もそこに何かがあり、何かを求めるから来遊する。

いわゆる give-and-take の関係である。

そう考えると観光客と住民の関わり方が見えてくる。

以下、観光ビジョンについて総論的に少し述べてみたい。

今までの奥多摩の観光の姿は、自然の中に箱物（奥多摩湖が代表的なもの）を造り、それに魅せられて大して宣伝もしないでも多く観光客に来てもらっていたのが現実であった。

でも、今では多くの人達はそれにも飽きてきて、より自然を求め、自然と触れ合うことを楽しむ方向へと変わってきているように思う。

そして、奥多摩には、これに応えられるもの（自然）がまだしっかりと残っているのは確かである。

この自然を活かし、最大限に利用していくことがベターである。

では、奥多摩の観光の将来を考えてみると、一番先に頭に浮かぶのが「森林セラピー基地」のプロジェクトだ。

極端ではあるが、奥多摩の観光は、これ以外には考えられず、これが成功するかどうかにかかっていると断言しても過言ではないだろう。

このプロジェクトを推進するには、1にも、2にも、住民の関わりと協力が一番重要になるだろう。

今までのように、ただ観光客が来てくれるのを指をくわえて待っているのではなく、積極的な誘致に関わり、しっかりと対応する心構えを持つこと、そして、少しでも多くの対価を得られるよう、住民一人一人の意識改革が必要だ。

そして、もう一つ大事なことは、観光客にはマイカーではなく、電車を利用して来てもらうことだ。

奥多摩には平坦地が少なく、したがって、駐車場の設備が難しく、また、マイカー利用による公害問題も発生する。

電車を利用することにより、これらの問題も解決することができ、また、帰りには町の中でゆったり、のんびりしていただき、心を安らげ、鋭気を養って帰っていただくことにより、住民も観光客も元気になれることが肝要である。



委員 渡辺幸治

短・中・長期に対する思い

奥多摩町は広い面積・森林 94% 各自治会が 21 箇所 に点在しています。住民同士も例えば峰谷の奥集落から大丹波の中茶屋辺りまで行ったことがあるか疑問です。自分自身も観光の仕事につかなければ、奥多摩町全体を歩くことができずに終わったと思います。

観光ビジョンで各自治会の絵図を作成することで、町民同士の意識改革・奥多摩を深く知ることに役立つと思います。中・長期の流れの中に町民がスムーズに入って来てもらえると信じます。住民参加の観光を目指して、奥多摩により多くのお客様に来ていただき、それなりの収益を上げて住民が潤えば活性化してくると思います。箱物観光は要りません。環境を破壊しないように登山道・ハイキング道の整備をして、また奥多摩の文化・伝統をアピールしてリピーター作りをしなければなりません。

特に多摩川べりを歩く青梅からの遊歩道の設置が不可欠です。青梅市と共同で、要望し実現してほしいと思います。青梅市にとっても観光の目玉になると思います。2 年間やってきた思い

2 ヶ月に一度くらいということで、発足しましたが間の空け過ぎということで、毎月になり出席率が高い委員会であった。コンサルも入らずに言いたいことを言い合っていた会議だと思っています。年齢層も幅があり若い人・そうでない人から意見が出て、年齢により考え方の違い、町外から来た方の考え方、自分自身大変勉強になりました。法政大学の学生の奥多摩に寄せる思いを発見でき力強くなりました。是非大学生を奥多摩に来るようお願いしたいと思っています。

事務局の毎回会議の議事録は発言者の名前があり、会議を欠席してもすぐに参加が出来、話が見えた。本当にご苦労様でした。

東京都観光部で青梅・奥多摩観光まちづくり委員会でもスーパーバイザーが入り、話し合いを大体同時に進行しております。観光をどうするかがテーマであり、すでに誘客を PR していただき、旅行業者・新聞社・コピーライターの人達に実際、青梅・奥多摩をみていただき、TV・新聞・雑誌に宣伝していただくよう実施しております。

観光ビジョン策定委員会の提案が絵に描いた餅にならないように、具体化するようには是非お願いします。

雑感

奥多摩の観光をどうしようと考えてきましたが、奥多摩町だけではなく他の地域

(あきる野市・日の出町・檜原村・小菅村・丹波山村)と連携して、宿泊も連泊型にするコース作りを設定し奥多摩のネームバリューを活かしたいと思います。





委員 富田高幸

私は、奥多摩町観光ビジョン策定委員会を2年間努めさせていただきましたが、当初は、奥多摩町出身でありながら、意見交換にも積極的に参加できず、話題にも的が絞れず、といった状況でありました。

このような状況の中、各委員の奥多摩町に対する熱い想いに触れている間に、私なりに、奥多摩町の観光地としての役割、これに伴う奥多摩町の経済効果等、観光から多種多様な方向性が見出されることに非常に興味を持つ事が出来ました。

奥多摩町には、恵まれた自然環境、奥多摩の文化、交通アクセス等、まだまだ、創意・工夫を重ね、知恵を絞れば沢山のお宝があり、多数のお客様に訪れていただける町であると認識したところであります。

先人が積み重ね、培った文化を活用しつつ、四季を通じて奥多摩町を訪れるお客様に、また、来たい(期待)、また、会いたい、また、見たいと思われる奥多摩町にしていきたいと思えます。

今回、観光ビジョン策定委員会に参画させていただき、奥多摩地域の観光に対する状況を過去から振り返り、今なにをすべきか、将来はどうすべきか等、いろいろと意見交換を実施してきたことは本当に有意義でありました。

今思えば、私が、奥多摩町の地元の方々と一杯をするときなど、みんなで、奥多摩町のことについて語ることがあります、これこそ、地元の方々が、奥多摩町に住んでいることに誇りをもち、この奥多摩町を愛していることに他ならないことだと思えます。

今、奥多摩町は過疎化が進み、世の中の流れと同様に、少子高齢化であります。今まで、この奥多摩町を築いてこられた先輩方に感謝をし、これから奥多摩町を背負って立つ子どもたちに、この地域を大事にしてもらい、私も少しでも奥多摩町の良さを町内外問わずにアピールしていきたいと思えます。

どうもありがとうございました。



委員 尾花洋介

「ヤッホー」, 「ヤッホー」・・・湖面を渡って対岸にこだまする叫び声、何十年ぶりのことだろう。なんて気分のいいものか・・・。身体の中を何かが突き抜けたような気がしました。

これは新しく完成された奥多摩湖南岸の“いこいの路”を委員全員で視察した時のことです。インタープリターでもある長谷川委員のおかげで体験することが出来た一日でした。長谷川さんから「ここに落ちている木の実はこの木の実です。」「この虫はこの落葉の下の土で生まれた」という虫です。」「そしてこの沢はこの集落のあった」という沢です。」等々の説明を受け、その「みち歩き」の一つのドラマを体感するような素晴らしい時間でした。

当委員会がよく口にされていた“水の精、山の精”・・・そして“奥多摩スピリット”というフレーズを実際に体感させていただいた貴重な一日でした。そのキーワードにもう一つ“人の営み”という言葉も加わって奥多摩の独特のキーワードが創られていきました。それを基に色々と検討が加えられ、最終的に「21の山里歩き絵図」というところにたどり着いていくわけですが、委員一人一人の熱い想いと事務局のしっかりとしたまとめによってこのようなレポートが完成されたことを嬉しく思います。

そこで是非お願いしたいことはこのようにして2年間かけて創り上げた奥多摩観光の基本的なあり方・・・ビジョンを今後どのようにして実現していくか、これは大変なことです。一朝一夕では出来ません。行政はもとより、観光に携わる方々、そして更には町民皆さんがこのビジョンをどう理解し、納得し、どう取り組んでいただけるか、大いに気にかかることです。私見ですが、その実現に向けて何らかの組織・・・委員会といった新しい仕組みを作られ、官民一体となってこのビジョン・・・プランが着々と実行され、奥多摩の観光事業が大きく発展し、そして町全体の振興に寄与されていくことを強く念願する次第です。



委員 長谷川幸子

「すみません、観光地はやめました。奥多摩は体感地です。」

海の近くで育った私が奥多摩で仕事をはじめたのは 10 年前になります。奥多摩では山のふるさと村ビジターセンターを訪れる様々な来訪者の方の対応をしてきました。今では第二のふるさとが奥多摩です。その奥多摩の観光について将来のビジョンを見出す今回の委員会に委員として参加させて頂けた事を今は心から感謝しています。なぜなら、この委員会は「本気・本音の話合い」だったからです。大事なのは現状を嘆くことでも適当に過ごすことでもなく、その問題にしっかりと向き合うこと、という委員の皆様の姿勢があったからこそ机上の空論ではないビジョンを提案できるまでに至ったのではないかと思います。ありがとうございました。

私が働く奥多摩湖畔公園山のふるさと村は奥多摩の中でも更に奥まった場所にあります。23 区内や横浜などから繰り返し訪れる方が少なくありません。何を求めて奥多摩に来るのか？もちろん理由は様々ですが、いわゆる「観光」目的の方はほとんどいないと感じています。自然の中でゆっくりしたい、美味しい空気を吸いたい、健康のために自然の中を歩きたい等「自分や家族の心や身体のため」に奥多摩を訪れる方が非常に多いのです。恐らくこの傾向は奥多摩全体にも当てはまるのではないのでしょうか？

私は自然の中を案内する仕事をしていますが、自然を楽しむことを目的に訪れる方に一方的な情報を提供するガイドはほとんどしません。確かに情報は喜ばれますが、「楽しくて勉強になったね」で終わってしまい、次の来訪に繋がりにくいからです。では、どんなことをすると「リピーター」になるのでしょうか。多くの方は決まった答え（自然の情報など）を提供されてその場を完結することよりも、答えの見つけ方（自然の楽しみ方）を知り、自ら何かを見つけ出すおもしろさを体験した時に「おもしろかった！また来たい。今度は何が体験できるかな」と次の機会を思うようです。テレビやインターネットなど情報を提供されることに慣れてしまった現在、体験することで自ら見つけ出す・自ら感じ取り考えるという行為は非常に価値のあることになってきたのではないかと考えられます。

今回提案する山里歩き絵図は、それを手にした方が自由に時期やコースを選び「どんな体験ができるだろう」と期待ができるものです。一度に 100 人が来る奥多摩ではなく、一人が 100 回来てくれる、そんな奥多摩が見える気がします。



委員 榎戸恵浪

1. 町内の子どもたちへの教育を中心とした取り組みを、観光のひとつのアプローチとして考える。

文化・伝統などを伝える

料理、風習、獅子舞、郷土芸能、など

自然を知る

山登り、釣り、川遊び、など

名人・達人

町の名人・達人を知る。技を知る。

観光地を歩く

町の名所、いわれを知り、むかし道など遊歩道を歩く

これは全て観光につながっています。この取り組みをあえて、というか全面的に町内外に向けて発信することで、観光を含め、波紋のような相乗効果が期待できます。

まず、町全体の充実につながります。そして町の基盤がしっかりと築かれ、これを土台にした町の未来への取り組みが出来ます。

町（町民）の活性化にもつながります。

町外の人が奥多摩町の魅力をただの観光地としてではなく、生活の延長線としてみる事ができます。これによって自然の中で生命力あふれる生活ができる魅力を感じ、その中から居住希望者も出てくると思います。

このような取り組みを行っている町はないのではないかと。そしてこの取り組みは現代社会に重要な一石になりうると考えています。

2. 奥多摩のシンボル（イメージ）を明確に打ち出す。

奥多摩の木は「杉」の木です。この真直ぐに伸びる木の特性と「あーぼーへーぼー」のイメージは似ています。「あーぼーへーぼー」に『奥多摩スピリット』の意味を込めて、町内外にアピールすれば、地に足の着いたシンボル（イメージ）になると思います。



委員 星野 勤

平成18年3月に奥多摩町観光ビジョン策定委員に委嘱された目的は、観光の見直し、新たな観光地づくりの推進と観光施設の充実を検討して、新しい観光の実現を目指すことであると認識しております。

そのため、月1回のペースで、色々なことを議論（協議）してまいりました。ある時は、「まちづくり・ひとづくり支援事業審査委員会」と合同にて、河村町長の基調講演および座談会（奥多摩町の目指すべき方向）も開催いたしました。また、視察研修として群馬県川場村の道の駅に行きました。

そのなかで、自然豊かな奥多摩町をいかに観光に結びつけるかは一朝一夕にはいかないが、体験、歩く、文化・自然という切り口を活かした観光ではないかと感じ、委員会も同様に考えております。体験とは、普段体験できない非日常の喜びであり、例えば、薪割り、わさび・しいたけ栽培などです。歩くとは、リラックスでき身体によいことであり、時間の制約を受けずに、旨い空気、緑・川のせせらぎなどを体感することです。文化・自然とは、きのこ・こんにやく・とち餅などの食文化、山村での知恵を学ぶなど、昔ながらの文化・伝統に触れることです。

これから観光のために何かを作るのではなく、自然・文化・歴史など、地元にある宝物を探して、有効に活かすことが大切ではないかと考えます。交流人口による観光も大切であり、住民が受入れる（おもてなし）気持ちがあるかが、非常に重要なことと感じております。すなわち、住民＋観光関係業者が一体となり、観光を推進することと、それをいかに経済効果に結びつけるかが重要であります。

最後に、2年間に亘り一緒に議論した際の委員による発言が、年代・職場など色々な考え方の違いがあり、面白くもあり非常に参考になりました。我が町「奥多摩」をいかに活性化すればよいのかと、真剣に考えていることと情熱も伝わってきました。そのようなメンバーと、資料を準備していただきました事務局に感謝いたします。

ありがとうございました。

7. 法政大学人間環境学部「水と緑フォーラム・HOSEI」コメント



<水と緑フォーラム・HOSEI とは？>

私たち、「水と緑フォーラム・HOSEI」は法政大学人間環境学部の現地学習である「フィールドスタディー」がきっかけとなって活動が始まりました。2004年に、授業のフィールドとなった東京都奥多摩町を訪れ、そこで起きている深刻な環境問題（森林の問題、シカの食害、過疎化、高齢化など）を目の当たりにした学生は衝撃を受け、「奥多摩で見たこと、感じたことを忘れてしまいたくない。学生の私たちにも何かできることがあるのではないか」という思いを抱いた有志が集まって団体を発足しました。発足当初は、フィールドスタディーにおいて最も印象が強かった間伐材の放置された問題に焦点を当て、間伐材の有効活用について考える「間伐材プロジェクトK」という名称で活動を始めようとしていました。しかし、奥多摩町で起きている様々な環境問題を知るにつれ、間伐材の問題自体が奥多摩町で起きている環境問題のほんのひとつの問題にすぎず、間伐材の問題に特化して研究していても問題の本質はつかめないことが分かりました。そこで、奥多摩町で起きている環境問題のどれかひとつを研究するのではなく、問題全体を捉え、幅広いアプローチを考える必要性を感じ、現在の「水と緑フォーラム・HOSEI」と改称して現在に至っています。

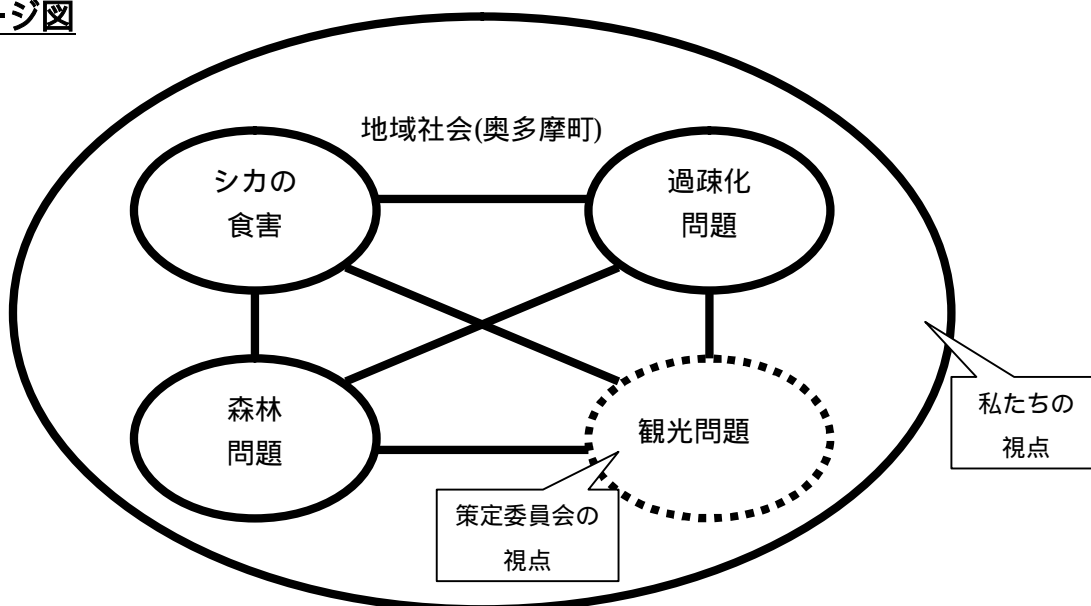
私たちは発足後何回も奥多摩を訪れる度に様々な人と会うことで多くのことを学ばせていただきました。山でのシカの食害による森林の砂漠化などの現場も実際に見ることができ、大学の講義ではわからない環境問題の現場の状況を知ることが出来ました。現在は中山間地域特有の問題である過疎化や高齢化などの「人」の問題に焦点を当てて奥多摩町の環境問題について考えています。森林の手入れをするのも「人」、シカを駆除するのも「人」、または私たちをもてなしてくれるのも「人」です。地域に人がいなければ町としての機能は失われてしまいます。この「人」の問題で最も深刻である過疎化と高齢化の問題は必然的な問題であり、避けられないものです。果たしてこれから奥多摩は町としてこの問題とどのように向き合っていくのでしょうか。私たちも自分たちにできることを追求していくことで奥多摩に貢献していきたいと思えます。

<環境問題の観点からみる観光の問題点>

策定委員会では奥多摩町における様々な問題の中でも、「観光」に焦点を当てて議論をしています。しかし、私たちは観光という視点からだけでなく、奥多摩町における諸問題をも視野に入れて観光を捉えています。つまり環境を学んでいるから奥多摩における観光事業がグリーンツーリズムになって欲しいと考えているわけでは

なく、全ての問題は繋がっているもので、その中のひとつとして観光があるという認識を持っています。

イメージ図



私たちは策定委員会参加者として、「環境問題を学んでいる都心の大学生」の立場で会議に参加してきました。そのような切り口から観光の問題に焦点を当てていくと、観光は奥多摩で起きている様々な環境問題と密接に関わりあっていることが分かります。例えば自然資源である森林を成長させるための間伐の作業が、経済的な問題や人材不足で行われていない現状は森林の状態を悪化させ、水源涵養機能の低下につながり、水質汚染によって奥多摩の名産であるわさびなどのきれいな水がなければ作れない作物に影響がでてきます。また、奥多摩の環境問題が悪化することは東京都心部に水を配給する役割をもつ小河内ダム機能が低下することによる影響も考えられます。

さらに、町全体の活気がないように感じます。これは決して町が賑わっていないという意味ではありません。町を変えよう、現状の問題点を解決させようとしている積極的な住民と、その他の住民との間に大きな差があり、そこを打開する必要があるように思えます。確かに、今のままでよいと感じている住民が多いかもしれません。しかし一方で、もっと良くなったらいいと感じている住民もまた多いのではないのでしょうか。「保守的になっている住民を活動に巻き込むにはどうしたらよいか」策定委員会では常にこの点についての議論が繰り返されていました。

このような考え方の中で、「今のままで満足なのに、変わる必要があるのか」という問いも出てくるでしょう。しかし私たちは、「同じ町の住民としてこんな思いを持っている、変えていきたい」という意見を、町の住民全体で共有した上で、そこから「変えることが必要か、そうでないのか」という話し合いの場が必要だと考えています。

< 私たちが考える奥多摩の魅力 >

私たちが活動の一環で奥多摩を訪れる度に「東京にもこんなに自然が豊かで素晴らしい場所があるのか」と嬉しい気持ちになります。さらに、現地で採れた自然の恵みをご馳走してくれる「人」がいるのも魅力です。観光においてこの恵まれた「自然」と「人」の資源を持つ奥多摩は、これを最大限に活かした観光ができるのではないのでしょうか。奥多摩町は東京都内でありながら自然が豊かで、代々受け継がれてきた風習が根付き、昔ながらの伝統文化を尊重する生活を営んでいる人が数多く存在します。それはもしかしたら奥多摩では当たり前のことなのかも知れません。しかし都心で生活する者にとってそのような生活はとても新鮮であり、東京にいなながらこのような生活に触れることができるのは大変貴重なことであると考えます。

そしてしばしば会議の中で「住民が楽しめる地域にすれば、観光客は来る」と委員の方々が何度も述べられていましたが、楽しむということは自発的に起こるものとは限らず、外部からの刺激によってそのような感情が芽生えることもあります。つまり、観光客が来るから楽しめるということもあるのではないのでしょうか。策定委員会でも話し合われてきたように、「人」と「自然」両方の主体が奥多摩には存在し、それぞれ異なる固有の価値があります。しかしながら自然は誰が見ても普遍的ですが、人についての価値観はそれぞれ異なります。人の魅力を無理に伝えるのではなく、会う人会う人に語りかけることで少しずつ魅力が相手に伝わっていくことが大切だと思います。

< 次の一歩へ >

策定委員会のような行政・商業者・住民などの多様な主体が同じ場に集まって議論する場を設けることを、私たちは「プラットフォーム構想」と呼んでいます。果たして奥多摩町ではこのような住民との話し合いの機会を設けた議論の場は他にあるのでしょうか。観光の問題は行政だけの問題ではありません。住民全てが考えなければならない問題です。現在の奥多摩の住民全てが観光の推進に前向きでしょうか？答えは会議の中にも多々出てきましたが、一概にYESとは言えないでしょう。そもそも奥多摩にとっての観光とは何なのでしょう？奥多摩町には奥多摩町の「身の丈」にあった観光があります。地域にある資源をしっかりと認識した上で、行政主導のトップダウンではなく、住民主体のボトムアップを促すような政策を展開して行ってほしいです。

今回、この会議の場では議論を交わすことで奥多摩町におけるビジョンを構築することが出来ました。会議の中でも具体的な行動案が出されていたように、話し合った後にはビジョンにそった行動に移すことが大切です。

ここからが奥多摩町の観光の第一歩です。しかしまだ「一歩」にしかすぎません。この一歩を次の一歩に進めていくには、ビジョンある行動を有機的につなげていくことで町を変え、人を変えていかなければなりません。ビジョンを掲げただけで満

足せず、常に多様な意見を尊重した政策を推進してほしいと思います。私たちも、自分たちが奥多摩に対してできることを模索しながら活動していきます。